

月刊

いじろのとも

第六卷

十一月号

醜きこころ

障害を

もつ人々に

関わりし

多くの人の

奥底に

醜きこころ

見るにつけ

この世の幸の

遠き思ひす

都合のよい正義感

自らは

いつも許すが

人さまは

決して許さず

常にとがめり

人生を考え直して

みたい人は(一二三)

『老子』解説(一二三)

今月号は最後の章の第八十一章を取り上げます。

(第八十一章) 信ずべきことばは美しくなく、美しいことばは信ずるにあたいません。善である人は能弁でなく、能弁な人は善ではありません。智である人は博学でなく、博学な人は智ではありません。聖人は積まないで、ことごとく人に与えますが、自分はいよいよ豊かです。
天の道は、利益を与えて、害は与えません。聖人の道も為して争いません。

これらのことばは、かなり逆説的ですが、極めて深い真理を含んでいます。それだけに、分かりにくくなっています。順次、解説して行きたいと思えます。

まず出だしの「信ずべきことばは美しくなく、美しいことばは信ずるにあたいません。」ですが、なかなか含蓄が深く、理解できにくいのではないかと思います。

孔子の言葉に「巧言令色、鮮(すくな)し仁」というのがあります。話が巧みで、人あたりのよい人は、仁が少ない、といったほどの意味ですが、これなら常識的で、日常生活の中でいくらでも実例をあげることができま

す。ですから、誰でもが「その通り」と納得するのではないかと思うのです。
ところが、信ずべきことばは美しくなく、美しいことばは信ずべきほどのものではないと言われますと、「待てよ、そんなこと。じゃあ、信ずるとは何なのか、美しいとは何なのか」と言いたくなってくるのではないのでしょうか。

これまでの老子の解説でお分かりと思うのですが、老子のことばには、常識を超えた深い意味、深い真理が含まれています。ですから、一つ一つのことばを常識で理解するのではなく、その本来の意味を吟味しなおしてみ

る必要があるのです。
まず、美しいということですが、これはかなり主観的です。美を感じる感じ方は、人により千差万別です。ですから、美しいことばも人により、かなり違いがあると思うのです。美しいことばを追求するのは、文学ですが、例えばその中で、私がかつてよく読んだ坂村真民さんの

詩は美しいことばで述べられています。真民さんが自らの真言とされる「念ずれば花ひらく」ということばも、とても美しいと思います。でも、真民さんもおっしゃっていましたが、この真言を聞いて、実際につぼみの花を摘んできて、真民さんに突きつけ「念じて花を咲かしてみなさい」というように即物的にとる人さえいるのです。このことばにどう感動するかは、一人一人万別なのです。真民さんを実例にあげさせて頂きましたが、これは他の詩でも、小説でも同様です。どんなに美しいことばでも、「美」として追求される限り、それはどこまでも、私のモデルでいいます一人一人の「情動」や「感覚」といった、「自己」に属することなのです。

では、それを「信じる」とはどんなことなのでしょう。この信については、既に本誌の平成六年八月号で取り上げました。ちょっと難しいかも知れませんが、それは、無意識の自他の統合に基づいて、意識水準の自他それぞれの精神機能の統合をはかることに関係しているのです。つまり、自己の感覚や情動を楽しんだり、自己の主張を押し通したりするのではなくて、他者の心を感じて、それを尊重すべく自己の情動を制すること、および、人が社会的に認めているしきたりや法に従って行動すること、に関係しているのです。自己が決めたことを自分

でどこまでも守ることに関係していることなのです。

具体的に言いますと、例えば、釈尊のあげられた五戒があります。それは、不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不飲酒ですが、この他にも、十善戒や六波羅蜜などがあります。こうしたことばは、美しいとは言えませんが、信ずべき価値のあるものです。自分ではすぐには達成できなくても、ひたすら信じて、それに従おうとすべきものなのです。現代人のように自己に閉じ、居直って、信じることを止め、文学のような甘美なものに耽って、この世は全体として墮落していくだけなのです。差別も戦争も不安もなくなっては行きません。人間が人間らしく生きていくのに、理屈はいりません。たった五つの戒律を誰もが守れるように、自分を磨いて行くだけなのです。美しい文学や美しい美術や美味な料理は、自己を癒し慰めるかもしれませんが、人間が人間らしく生きるのに、本当はたいして意味はないのです。

次の二つの文に移ります。それは「善である人は能弁でなく、能弁な人は善ではありません。」と「知である人は博学でなく、博学な人は智ではありません。」です。この二つの文に出てくる能弁と博学はどちらも、「あたまたま」の働きである認知 言語に属します。言葉を巧みに操り、しゃべることが能弁であり、言語で様々なことを

知識として得るのが、博学です。

では、これらと対になる「善」と「智」とは何なのでしょうか。先ず善ですが、これは、自我 人格の働きに属することです。善や悪は、特に、その中の他己に属する人格の働きとの関係でまきまきすることです。人間は、自分で住む世界なら何をしても善とか悪とかはありませぬ。ある行為が善となるか悪となるかは、多くの人々がしきたりや伝統として認めているか、法になつていないか、などに従つて判断されます。例えば、しきたりや伝統の類になると思うのですが、江戸時代ですと、敵討ちで相手を個人的に殺すことは、武士として立派なこととされましたが、今では殺人罪とされますし、逆に、亭主のある女性を誘惑して駆け落ちなぞしますと、江戸時代なら市中引回しのうえ獄門磔の刑に処せられました。今では刑法上の罪にはなりません。

ですから、こうした善悪は時代に相対的だと言えます。でも、全ての善悪がそうではありません。いつの時代でも普遍的な、法と呼べるような善（や悪）があります。それは、既に述べましたように、五戒であり、十善戒であり、六波羅蜜であると言えるのです。この中には、一見して、他者についてではなく自己のことについてのものがあります。例えば、五戒の中の不飲酒や、六波羅蜜

の中の精進や禅定や智慧です。こうしたものは、そうしなかつたからといって、直接あるいは直ちに、他者に迷惑を及ぼすわけではありません。ですから、これらの徳目は現代では僧侶にすら守られていないのが現実です。

でも、それは表面上のことであることに気付かなければなりません。相対的ではない、普遍的な法を実現するための他己に属する人格の働きが十全に発揮されるためには、実は、自己と他己の統合が要るのです。それも意識してできるものではない、無意識の統合が要るのです。釈尊のことばでいいますと「天上天下 唯我独尊」と言える自内証（自分自身の心の内に感じるもの）がいます。それは絶対自己の自覚と言えますが、同時にそれは、絶対他者（仏や神）の自覚でもあるのです。そうなたたとき、真に他者のために善をなし、悪をなさなくてもよくなるのです。

このようにみてきますと、善は、認知 言語の働きを越えた働きであることが分かります。これは、次の智についてと同様です。智は、知識とは違うものです。知識は「あたま」の働きですが、智は自己・他己の統合されたとき出てくる覚りの智慧、仏の智慧なのです。現代人が大切にしている知識は、善をなし悪をなさないようにするの、殆ど役に立ちません。行動に際して自己への執ら

われがあれば、そうした知識は考慮されなくなったり、自己を主張するのに有利なものだけが使われるようになってしまうのです。それは、人格の働きについても同様です。智慧と呼べるものは、自己への執らわれを離れて、「行住坐臥が法にかなう」といえるようなものでなければならぬのです。

次に進みます。「聖人は積まないで、ことごとく人に与えますが、自分はいよいよ豊かです。」ですが、この文も、かなりあいまいです。何を積まないのか、何を与えるのか、なにが豊かなのか、など明らかではありません。読む人が補って読まなければなりません。以下は私の一つの解釈です。

まず、積まないのは何なのかですが、今まで読んだ本ですと、それを財産と解釈する人が多いのです。でも、私は、自己のためにすることがないと解釈したいと思います。もっと言いますと、自己のために生きるのではないということです。生きているのは他者のためだけである、ということです。

それが、次の「ことごとく人に与える」ということなのです。ですから、与えるものは自分自身ということになります。

そうするとき、自分自身の心はこの上なく豊かである

と言うわけです。

現代の日本を見てみますと、経済的に極めて豊かになりましたが、それと引換えに人々の心はどんどん貧しくなってきたように思えます。人に愛をあげるのではなくて、人から愛を貪欲にもらいたがっています。それが、心が貧しくなっている証拠です。老子で見ましたように、自分が生きるのは、自分のためではなく、どこまでも他者のためであるというような境地になるよう、日本人皆が、こんなことの言える老子の爪の垢でも煎じてのみたいものです。

最後の「天の道は、利益を与えて、害は与えません。聖人の道も為して争いませぬ。」ですが、これも天の道とは何なのか、意味がはつきりしません。それを、天然自然の道とする人が多いのですが、私は、神の道、仏の道、あるいは、法の道とりたいと思います。それに対して、聖人の道は、天の道を体得した人が示す人の道とりたいと思うのです。私のモデルで言いますと、自己と他己が統合されたとき、実は、人の道は法の道でもあるのです。そうした道を体得した人は、既に述べましたように、自己を捨てて他者のためにのみ生きるわけですから、利益を与えても害は与えず、自己の利益を主張して争うことはないのです。

自作随筆選

子どもの言葉

いま、子どもたちの言葉が乱れています。

もう一年も前のことでしょうか、ある食料品店で経験したことなのですが、その店番をしていたおばあさんの、保育所へ行っている三歳ぐらいのお孫さんが、おばあさんが気に入らないことを言ったらしく、「ばばあ、蹴りをいれたるか」と言うなり、おばあさんを「ポン」と蹴飛ばしたのです。でも、おばあさんはニコニコして、何も言いませんでした。私は、その子が女の子だったこともあり、大変驚きましたが、その時は、ここのお家のしつけができていないから、こんなことが起こるのだと、納得していました。

ところが、最近、また子どものぞんざいな言葉づかいをするのに出会ったのです。

一つは、ある家のかどさきで、二歳すぎの女の子が、遊んでいて、自分のおばあさんに気に入らないことを言われたのか、「ばばあ」といって、「ぶうー」と唾をひりかけたのです。おばあさんはやさしく、「そんなこと

をしてはだめでしょう」とたしなめました。そこに居たお母さんは何も注意しませんでした。

もう一つは、あるお家にお邪魔していたとき、その家に遊びに来ていた六歳になる女の子が、お母さんへ車でお迎えに来るように電話したのですが、その時の言葉づかいがおよそ私には信じられないものだったのです。それは、「お前、なにをしてるんや、早よう来い」というものだったのです。また、その同じ日に、その子のお兄ちゃんが出前のお寿司を食べるとき、自分のおばあさんに「早よう、ワサビを取れえー」と命令口調で言ったのです。おばあさんにとってはいつものことなのか、大して驚くこともなく、注意もしませんでした。

もちろん、機嫌良く遊んでいるときは、可愛い言葉も使っているのですが、気に入らない時や命令する時の口調になりますと、自分と全く同等か、それ以下の者への口調に変わってしまうのです。

こんなことは、私が子どもの頃には、考えも及ばないことでした。「目上の人を敬いましょう」とか「親孝行をしましょう」といった儒教の教えが残っていたこともあるのでしょうか、そうした儒教の教えを意識しなくても、少なくとも大人に対しては同僚とは違った「敬語」ないし「丁寧語」を使ったと思うのです。でも、今は、

このように、私たちの時代とは「ここまで違って来たのか」と驚かざるを得ないほど違ってきています。

こうした現象は、何も言葉づかいを知らない、幼児に見られるだけではないようです。

先日、ある公園の掃除を受け持っているおばあさんに聞いた話ですが、その公園はある高校の近くにあつて、よく高校生がデートに来るそうで、便所をいつも汚し、ちよいちよい何も処理しない、使用済のコンドームが捨ててあるそうです。ある日掃除に行ったとき、たまたま高校生の男女がことに及んでいて、「あんなたち何をしてるの」と言ったところ、「くそばばあ、黙れ、早ようあつちえ行け」と言われとのこと。おばあさんはあきれたものが言えなかったと言っていました。

また、大学院へ内地留学して来ている四十歳代の中学校の現職教師の人たちに聞いた話ですが、昔だったら、悪いことをしているのを見つければ、神妙に悪かったとその場の状況を説明、あるいは自白し、反省したそうですが、今は、どこまでも「平然」としらを切り通すそうです。いくら追求しても自白しないと云います。

これらの現象は、みな共通なものをもっているように思えるのです。それは、親や祖父母や先生などのように、子どもを直接養育し、教育している人さえも、「権威」

を失って来ているということ。「権威主義的」に子どもに接することはよいことではありませんが、しかし、人間が生きていくためには、従わなければならないルール、法があり、けじめがあります。人の道があります。それは言わば「権威」といえるもので、その最たるものが、人間の力を超えた自然であり、神や仏であるといえるのです。

ところが、現代の日本ではそうしたものが失われ、人間自身が「自己を権威化」し、一人ひとりが「自己を絶対化」して来ているのです。

その典型例が、いま話題騒然となっているオウム真理教です。彼らの記者会見を見ていますと、先ほどの中学生の例と全く変わりません。悪いことをしても、見つかるのが不運だとか、見つけるやつが悪いとか、自分としては善いことをしている、あるいは、これぐらいは自分には許される、といった具合にしか考えていないように思うのです。自分が悪いと反省することがないのです。そういう人ほど、オウム真理教と同様に、自分には寛大なのに、他者には厳しく、命まで奪つても当たり前だと思ふものなのです。

最近、幼児の言葉のぞんざいなのを身近にみて、これから世の中がどうなつて行くのか、思いやられました。

自作詩短歌等選

通心の理由

人間が
コミュニケーション
しなければ
ならない理由は
人間は
他者に定位を
するとき
はじめて安心
得られるから

権威の言うこと

権威とは
信じられると
いうこと
しかし
現代人は
権威の言うことが
自分に
実行できそうにないとき
信じることが
できない

思想の風化

いま
思想が
風化している
どんな
思想も
その真理性を
誰に対しても
主張することは
できない
残るのは
感情的な
一体感だけ
民族
宗教
イデオロギー

なるようになる

ある宗派の
仏教者は
困っている人に
なんとかなる
と言って激励して
あげるとい
でも
人生は
なんとか
ならないもの
なるようにしか
ならないもの
なのに
ひたすら
念じて
努力しなければ
ならないもの

エリートコース

幸せは
エリートコース
歩んでも
訪れるとは
限らない
多くのエリート
入信せし
オウム教団
その証なり
日本人
そろそろ気付
他に先駆けて
エゴ追求の
空しさ
他己追求の
充実に

政治的力の世界

民主主義は
政治的力の世界
日本の大学のように
業績評価のない所では
学問の世界でさえ
政治的力がものをいう
力のない者のもつ
善良さも
真実さも
人には通じない
力のない者は
力のある者の
庇護の下に
哀れみを
いただく世界

ことばが空しい

いま
ことばが空しい
それは
ことばにこころが
なくなつたから
ことばが
役割遂行の道具に
なつたから
取引行動の道具に
なつたから
自己宣伝の道具に
なりさがつて
しまつたから

こころを

取り戻すべき
ことば

哲学・宗教
解脱・愛
約束・人権
平等・平和

悪を重ねる

気付かずに
一つの悪を
なしし後
言い訳なして
さらに悪なし

釈尊のごとば（四〇）

法句経解説

（一四七）見よ、粉飾された形体を！（それは）傷だらけの身体であつて、いろいろのものが集まつただけである。病いに悩み、意欲ばかり多くて、堅固でなく、安定していない。

大して難しいことばはありません。人間のもつ動物的な身体への執着を捨てることを説いています。

まず「見よ、粉飾された形体を！」ですが、これは、勿論、各個人がもつ身体のことを言っています。この身体は、ただ、いろいろな物質的要素が集まつてできたもので、いくら飾つても、傷だらけで不完全なものだということなのです。

ですから、病気にかかったり、物質の消耗やそのバランスの崩れに伴つて、様々な欲望が起こつてきたりします。もし、欲する物質が補給されず、身体のバランスの回復ができなければ、もろくも仮の安定は崩れさつていくのです。その危機は常にそこに迫っているのです。

日本人はいま、欲望の追求にきゅうきゅうと追っています。それ以外に生き甲斐がないのです。経済的欲望を追

求し、それによつて得たお金を使うために、多くの人が海外にまで出掛けて、グルメ旅行、セックス旅行にうつつを抜かしています。また、スポーツに異常に熱狂して、優越欲を満足させています。例えば、オリンピックは個人としてではなく、国民みんなの優越欲を満足させるために、国民の榮譽や期待を担つて参加するものになつてしまつています。なんとばかばかしいことでしょうか。そんなエネルギーがあつたら、もっと修行して、海外にまでグルメ旅行したりセックス旅行しなくてもよいように、この身体や欲望を自分でコントロールできるようになつてもらいたいものです。

（一四八）この容色は衰えはてた。病の巢であり、脆くも滅びる。腐敗のかたまりで、やぶれてしまう。生命は死に帰着する。

どんなに若さと美貌を誇つた人も、五十年もしないうちに、容貌は衰えて、みるかげもなくなつて行きます。百年もすれば、もうその生命の存続すらが危うくなつてしまふのです。

百年は長いようですが、経つてみれば短いものです。病院へ行つてみればすぐ分かりますが、待合室に並ん

でいる人は、大多数が老いた人です。一人の人が、いろいろな病気を抱えています。年老いても、どこも悪いところがないという人は、少ないのではないのでしょうか。

そのように病気にかかりながら、肉体は段々と、脆くも滅んでいきます。死後、自然の中に放置しますと、徐々に腐って行き、皮膚が破れて、中身が溢れだし、骨が見えてきます。そして、最後は白骨だけが残っていくのです。しかし、その骨もやがて風化し、土に帰ってしまいます。

人間はいま生きていますと、いつまでも生きていられるように思ってしまう。特に、生気のみなぎつた若いときは、そう思ってしまうものです。そして、若い貴重な時間を、怠惰におちいり、惰眠を貪って、無駄に過ごしてしまふのです。

仏教は、この偈にもありますように、常に死を見つめて生きることを説いています。

四国八十八力所霊場の二十三番札所、厄除けで有名な薬王寺だったと思いますが、大きな塔があり、そこに陳列してあるのですが、人間の死んでいく過程が、かなりリアルに描かれています。死とはどんなことなのか、あらためて考えさせられます。お参りになられましたら、一度ご覧になられたらと思います。

一四九）秋に投げすてられた瓢箪のような、鳩の
のようなこの白い骨を見ては、なんの快さがある
か？

瓢箪を栽培したことがないものですから、よく分からないのですが、秋に採れた瓢箪を捨てておきますと、品種によっては、骨のように白く見えるようになるものがあるのでしょうか。次の鳩ですが、鳩は、真っ白なものがいますので、そうした白くなった、人の骨を見ますと、おそらく誰でもが「ぎょっ」として、気持ちが悪くなるのではないのでしょうか。

勿論、現代では、人骨がそこらに転がっているということは、日本では、ありません。しかし、例えば、カンボジアでは、最近まで多数の虐殺が繰り返され、人骨がそこらじゅうで見られたと言います。

そうした人骨を見たとき、私たちは、ただ気持ち悪がるだけで終わってはならないのです。人間は誰でもが死んでいくこと、そして、自分もその例外ではないことを、いまに引き寄せて、感じなくてはなりません。そうして、自分の死をそこに感じるができるほど、宗教心も芽生えてくると言えるのです。

後記

一、今回の『老子』解説ですが、少し難しかったと思います。それは、多くが常識を超えたことだったからです。殆どの解説書は、常識の内です。扱っていませんが、それでは老子の思想を捉えることはできません。解説しました内容に、「ほんとかなあ」とか「そんなことはない」と納得できない方もあるかもしれませんが、私の述べているのは真実です。「信じて」何度も読みなおしてみたいと思います。

二、今回の八十一章は『老子』の最終章でしたが、それだけに、締めくくりに相応しい内容であったように思えます。道を体得した人・聖人の心境ですので、普通は分からないのがあたりまえと言えるのです。

三、「障害児教育を支えるコミュニケーション（）」と題する論文を書きました。今回は、私の「自己・他己双対理論」に基づいて、コミュニケーションとは何かについて検討しました。

四、また、九月末には「自己・他己双対理論に基づく人間精神発達理論」と題して、人間の精神が育っていく過程と法則について検討する論文を大学紀要に投稿しました。以前書いていたものをまとめ直したものです。

五、先月号に載せました随筆「オウム事件の病理」を、

奈良県大和郡山市にお住まいの中学校の教頭をなさっておられる山中光雄先生が、ご自分の個人誌にかなりの部分を引用して下さいました。また、ほかに面白かったとご感想を寄せて下さった方もありました。

六、さらに、先日、阿南市にある真言宗医王山光明寺の浅川雄康住職様から本誌を送ってほしいとお電話を頂き、第五巻から二年分弱をお送り致しましたところ、お手紙と共に、ご自身の寺の寺報『仏教のこころ』をお送り下さいました。お手紙には「最近、町のお老人を集めて仏教のお話をするテキストに先生の短歌や詩を使わせて頂いています」とありました。ありがたいことです。

月刊 こころのとも	平成七年十一月八日
第六巻 十一月号 (通巻 七十一号)	〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひよ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

